

ところ会員各位

ところ会 3 月行事案内

平成 31 年、第 3 回テーマ

【上野の歴史を訪ねる／ ユネスコ「世界の記憶」・・・上野三碑】

平成 31 年の春のバス旅行を下記の通り計画しました。

記

■日 時：平成 31 年 3 月 7 日（木）8 時 25 分集合

■集合場所：西武池袋線武蔵藤沢駅西口

■見学場所及び時間

武蔵藤沢駅西口 8:30⇒圏央道入間 IC…圏央道…関越自動車道…
（上里 SA トイレ休憩）…前橋 IC⇒前橋市総社歴史資料館⇒山王廃
寺跡⇒上野国分寺跡・上野国分寺館⇒昼食処(マウントクック)⇒箕輪
城址⇒箕郷梅林⇒金井沢碑⇒多胡碑記念館・多胡碑⇒山上碑・古墳
⇒道の駅らん藤岡⇒藤岡 IC⇒関越道⇒圏央道⇒入間 IC⇒武蔵藤
沢駅到着(18:30 頃)（解散）

■昼食場所：マウントクック、オーダースープ付きフィッシュランチ

■参加費用：5,000 円（昼食代含む）

■見学場所簡単ガイド

<前橋市総社歴史資料館>

榛名山のふもとに位置する総社地区は、前橋市の歴史を語る上で欠かすことのできない数多くの歴史資産が残されています。これらの文化財の至近の場所に位置する前橋市総社歴史資料館では、当地区の開発や発展の様子について知ることができます。



1 階展示室では、古くより著名な古墳群で、県内最大級の終末期古墳を擁する「総社古墳群」、東国最古級の古代寺院であり、全国的にも貴重な資料が発見されている「山王廃寺」、総社城の築城や天狗岩用水の開削など当地区の基

礎を築いた「秋元氏」について、出土品やジオラマなどの展示を行っています。
2階展示室では古代から現代までの生活に関する展示や、企画展示などを行っています。

常設展

◇総社地区の文化財／◇東国の雄「総社古墳群」／◇山王廃寺／◇秋元氏と天狗岩用水

<史跡：山王廃寺跡・「放光寺」>

山王廃寺は古代上野国の中心地域である前橋市総社町に、7世紀後半の白鳳期に建てられた県内最古の寺院です。大正時代初めに、塔の心柱を支える塔心礎が偶然発見されて見つかっています。その後の調査の結果、東日本を代表する古代の寺院であったことがわかりました。

昭和～平成の調査によって、寺院の伽藍配置が明らかになったほか、塔に関連した根巻石や石製鴟尾、金銅製飾金具、塑像など数多くの優美な出土品及び仏具の緑釉陶器等も発見されています。

「放光寺」・「放光」という文字を刻んだ瓦も発見され、この寺が「山ノ上碑」や「上野国交替実録帳」に記録されている「放光寺」であったことがわかりました。上野国の政治に深く関わった豪族が、権力の象徴として建てた寺院と考えられます。



<史跡：上野国分寺跡>

◇上野国分寺跡の概要

奈良時代の天平13年(741)、聖武天皇は国ごとに僧寺と尼寺を造ることを命じました。これが国分寺で、後に僧寺が「国分寺」と言われるようになりました。当時の群馬県は上野国と呼ばれており、その国分寺は今の高崎市と前橋市の境近くに建てられました。

上野国の国分寺は、政治の中心であり今の県庁にあたる国府の北西に、僧寺・尼寺がそれぞれ東西に並ぶように建てられ、歴史書によると旧碓氷郡や旧勢多郡の豪族の協力により、750年頃に主な建物が完成したようです。全国の国分寺の中でも、最も早い時期に建立され東西約220メートル、

南北約 235 メートルの広さをもち、周囲は築垣（土堀）で囲まれていました。その中央には本尊の釈迦像を祭る金堂と高さ 60.5 メートルもある七重塔が建てられていました。古い記録や調査から 1000 年頃には築垣や門は壊れてしまいましたが、金堂などは残っていたことが分かります。



◇国分寺が造られた時代背景

今からおよそ 1,250 年前、平城京（奈良県）を中心に全国を約 60 の国に分けて治める律令政治が行われていた。当時、災害や政治の乱れに苦しんだ聖武天皇は、仏教の力でこれを治めようと、国ごとに国分寺を造らせるとともに都には東大寺を建立した。こうした寺院は政府によって造られました。各地方の豪族にも協力が求められました。

<上野国分寺館>

国指定史跡の上野国分寺跡のガイダンス施設。古代建築の権威である工藤圭章氏と考古学の大家である坪井清足氏の指導を得て、精密に再現した 20 分の 1 スケールの七重塔の模型などで往時の伽藍配置を学べるほか、発掘調査で出土した平瓦、軒先平瓦、丸瓦、軒先丸瓦などの遺物が展示されています。



◇七重塔が 20 分の 1 スケールで復元

館内では上野国分寺の歴史をまとめたビデオ、往時の想像図などから律令時代の上野国分寺の様子が浮かび上がってきます。

全国の国分寺の中でも最大級で、しかも短期間で完成したと推測される上野国分寺。高さ 60.5m の七重塔は、実は平成 10 年に 21 階建ての高崎市庁舎（高さ 102m）が完成するまで、群馬県における歴史上最高層の建物だったのです。

【昼食場所：マウントクック：ステーキ&シーフードレストラン】

ランチ・オーダースープ付きフィッシュランチ

お問い合わせ・・・027-371-6114

<箕輪城跡>

箕輪城（みのわじょう）は、群馬県高崎市箕郷町にあった日本の城（平山城跡）

で、国の史跡に指定されている。日本 100 名城の一つ。

◇概要：箕輪城は、榛名白川によって削られた河岸段丘に梯郭式に曲輪が配された平山城である。城の西には榛名白川、南には榛名沼があり、両者が天然の堀を形成していた。城地は東西約 500 メートル、南北約 1,100 メートル、面積約 47 ヘクタールにおよぶ広大なものであった。現在にのこる遺構として、石垣・土塁・空堀の跡が認められる。

<上野三碑>

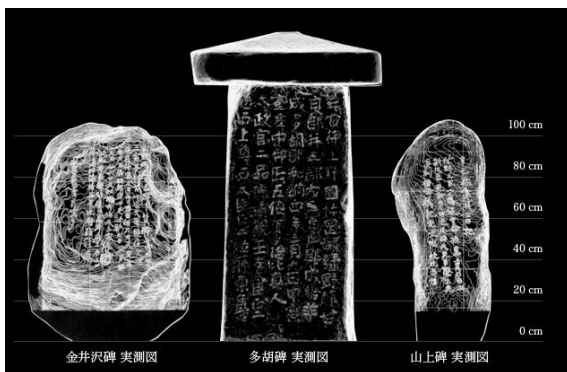
上野三碑とは前の東アジアの文化交流を記す 3 つの石碑

日本列島東部の古代上野国 [こうずけのくに] (現在の群馬県 [ぐんまけん]) に存在する三つの石碑「上野三碑 [こうずけさんび]」は、日本に 18 例しか現存しない古代 (7~11 世紀) の石碑のなかで最古の石碑群であり、大切に守られてきました。



それらは、山上碑 [やまのうえひ] (681 年)、多胡碑 [たごひ] (711 年頃)、金井沢碑 [かないざわひ] (726 年) と呼ばれています。三碑の記録形態は、上野国に住み着いた朝鮮半島からの渡来人がもたらしたもので、かれらとの密接な交流の中で、当時の都 (飛鳥、奈良) から遠く離れた地元の人々によって文字で刻まれたものです。

山上碑は日本語の語順で漢字を並べた最古級の歴史資料です。多胡碑は、18 世紀以来、中国の「書」の手本となってきました。金井沢碑は、この地での仏教の広がりを刻んでいます。これらの三碑は、東アジアにおける文化交流の実像を示す極めて重要な歴史資料です。



三碑に刻まれた内容は、中国を起源とする政治制度、漢字文化、インドを起源とする仏教が、ユーラシア東端の地である日本に到達しただけでなく、さらに遠く離れた東部の上野国に多数の渡来人の移動とともに伝来し、地元の人々に受容され、広まっていったことを証明しています。

このように三碑は、歴史的、文化的、社会的、政治的に、「世界の記憶」にふさ

わしい希有な価値を有するものです。

<山ノ上碑>

山ノ上碑（やまのうえのひ/やまのうえひ、山上碑）は、群馬県高崎市山名町にある古碑。国の特別史跡に指定されています（1921年（大正10年）3月3日に「山上碑及び古墳」の名称で国の史跡に指定され、1954年（昭和29年）には国の特別史跡に指定されている）。

概要：山上碑は、681年に立てられた日本最古級の石碑で、高さ111センチの輝石安山岩の自然石に53字が刻まれています。放光寺の僧である長利が、亡き母の黒売刀自を供養するとともに、母と自分の系譜を記して顕彰したものです。「辛巳歳」は天武天皇10年（681年）建碑と考えられており、上野三碑の中では最古であり、高さ120cm・幅50cm・厚さ50cmの輝石安山岩に4行53文字が薬研彫りで刻まれている。書体は古い隷書体の特徴が見られます。

山ノ上碑は墓誌であり、隣接する山ノ上古墳（下記参照）の墓誌であると考えられている。その内容から、放光寺の僧侶・長利（ちょうり）が母の黒売刀自（くろめとじ）のために墓を建てたことがわかり、墓誌としても日本最古の例である。「放光寺」は佐野の地にあると考えられてきたが、最近の発掘調査により、前橋市の山王廃寺跡にあった寺院の可能性が高くなりました。刻まれている文のほとんどが、長利母子の系譜を述べており、古系譜の史料としても貴重である。

また、山ノ上碑に刻まれている「佐野三家」は金井沢碑の「三家」（ミヤケ、屯倉）であると考えられてきましたが、周辺の発掘調査により、史料上知られていないミヤケの存在が確実視されてきたため、「佐野三家」と「三家」は同一でないという可能性も出てきました。

<山ノ上古墳>

山ノ上古墳（やまのうえこぶん、山上古墳）は、山ノ上碑の東側にある直径15m程の典型的な山寄せの円墳。埴輪・葺石は確認されておらず、古墳としては終末期古墳に属するものとみられます。

主体部は凝灰岩の切石積み横穴式石室で、南に開口している。全長7.4m、玄室長2.68m、幅1.75m、高さ1.66m。



前述の通り、山ノ上碑は本古墳の墓誌と考えられるが、石室の形態などから古墳の築造時期は石碑の建てられた 681 年より数十年古い年代が想定されている。そのため現在では山ノ上古墳は黒売刀自の父の墓として造られ、その後、黒売刀自が追葬されたものと考えられています。



<多胡碑>

多胡碑（たごひ）は、群馬県高崎市吉井町池字御門にある古碑（金石文）であり、国の特別史跡に指定されています。また、書道史の上から、日本三古碑の一つとされる。建碑は、その内容から 8 世紀後半とされる。

概要：碑身、笠石、台石からなり、材質は花崗岩質砂岩で、牛伏砂岩と呼ばれ、近隣で産出される。地元では多胡石、天引石などとも呼ばれている。碑身は高さ 125cm、幅 60cm の四角柱で前面に 6 行 80 文字の楷書が丸底彫り（薬研彫り）とされてきたが、近年丸底彫りであることが判明した）で刻まれている。笠石は高さ 25cm、軒幅 88cm の方形造りである。台石にのせられた碑身は下部が四角錐状になっており「國」の字が刻まれていると言われるが、現在はコンクリートにより固定されているため確認できない。



<多胡碑記念館（吉井いしぶみの里公園内）>

多胡碑に隣接する多胡碑記念館では、古代多胡郡をしのばせる考古資料や、上野三碑のレプリカ（複製品）、多胡碑の碑文の書風にかかわる中国の刻石の拓本などを展示しています。周囲は緑あふれる吉井いしぶみの里公園として人々の憩いの場にもなっております。

常設展示・これまで 2 室に分かれていた上野三碑のレプリカを一堂に集め、1 室で見られるようになりました。それぞれの形や文字などを、比較しながら観察することができます。また、それぞれの石碑の解説はもちろん、上野三碑の概要や時代背景、世界的価値についての解説パネルを設置されています。



<金井沢碑>

金井沢碑（かないざわのひ）は、群馬県高崎市山名

町にある古碑であり、1921年（大正10年）3月3日には国の史跡、1954年（昭和29年）には国の特別史跡に指定されました。

概要：神亀3年（726年）2月29日建碑。

高さ110cm、幅70cm、厚さ65cmの輝石安山岩に9行112文字が刻まれている。台石にはめこまれ、文はその表面に陰刻される。書体は古い隷書体の特徴が見られる。

江戸時代の中ごろに出土し、かつては小川の

ほとりで付近の農家の洗濯板として使用されていたとの話があり。

その内容は、上野国群馬郡下賛（下佐野）郷高田里の三家（ミヤケ、屯倉）の子孫が、七世父母、現在の父母等のために天地に誓願して作る旨が記され、祖先の菩提と父母の安穩を仏に祈願している。ここから、郷里制の施行と奈良時代における民間への仏教信仰の浸透を知ることができます。

金井沢碑に刻まれる「三家」は山ノ上碑に刻まれる「佐野三家」であると考えられてきたが、最近の発掘調査により史料上知られていないミヤケの存在が確実視されているため、「三家」が「佐野三家」とは別のミヤケである可能性もある。



【参考】

＜上野国府跡（国庁伝承地 宮鍋神社）＞

646（大化2）年正月に発せられた大化改新の詔（みことのり）によって律令政治が開始。地方を治めていた国造（くにのみやつこ）制度は廃止され、大和朝廷から国司（こくし）が任命され、政庁としてしての国府が置かれました。上野国（こうずけのくに）の国府は、前橋市元総社町付近にあったと推測されています。

上野国国府の遺構は、残念ながらまだ発見されていませんが、上野国総社の旧社地ともいわれる宮鍋神社は、有力な候補地です。

宮鍋神社は、この地を治めた長尾氏が築いた蒼海城（あおみじょう）の跡で、蒼海城は上野の国府跡に建てられたという記録があるので、宮鍋神社一帯が上野国府跡の推定地とされています。



現在では、宮鍋神社を国庁とし、東西に八丁、南に八丁の国府域を想定。

一帯には関東でも最古級の白鳳寺院である山王廃寺跡（放光寺跡）や蛇穴山古墳、宝塔山古墳などの総社古墳群があり、古代に上毛野地域の中心地であることは明白であります。

それを裏付けるように宮鍋神社周辺から、多数の古瓦が出土し、元総社小学校校庭から大型の掘立建物の遺構が見つかっています。

<上野国分尼寺跡>

741（天平 13）年、聖武天皇の詔（みことのり）で仏教による国家鎮護のため諸国に建立された国分寺（金光明四天王護国之神）と国分尼寺（法華滅罪之寺）がありあす。上野国では国府（政庁）の北西に、僧寺（上野国分寺）と上野国分尼寺が東西に 500m の間隔で並んで建てられています。上野国分尼寺跡は基壇などが復原された国分寺の東の方向にあり、中門・金堂・講堂の建物基壇が確認されています。礎石などの出土物は埋め戻されているので、現在跡地は田畑が広がるのみで古代の国分尼寺跡をしめす碑が立っています。

上野国分尼寺跡は昭和 44 年～45 年の群馬県による発掘調査で、その存在が確認され、ようやく平成 28 年に講堂跡、東門跡と推測される地の調査が始まりました。それまで講堂跡だと推定されていた場所が、実は尼が日常の生活を送る尼坊あとだったことが判明し、東門跡だと思われていた場所は、門跡ではないことが確認されました。「上野国分尼寺の尼坊は、他国ではあまり見られない礎石を使い、それが大きいことに特徴があります」（高崎市教育委員会）。

その後、平成 29 年に東辺を区画する築垣の基礎部分、中門と金堂を連結する回廊跡の南東隅部などが発掘されています。

上野国分尼寺跡の西 540m には上野国分寺跡、さらに北東 1.5km の場所には関東でもっとも古い時代の古代寺院の跡である山王廃寺跡（国指定史跡／放光寺の跡と推測されています）があり、古代の上野国の中心的な場所だったことがわかります。

